

Makio Shozu

生水真紀夫

第 62 回日本臨床細胞学会総会（春期大会）会長

千葉大学大学院医学研究院生殖医学教授

コロナとの共進化

新型コロナが社会を大きく変えた。パンデミックを目のあたりにして改めて感染症が未だに克服されていない疾病であることを思い知った。診察すら受けられず亡くなった患者さんに心を痛めた。感染拡大の速さに、航空機を通じて世界がいかに密に繋がっているのか思い知った。100年前のスペイン風邪、それより前のコレラは船で日本にやってきた。ペストには世界的な感染拡大の前に、長く風土病ともいえる時期があったという。新型コロナの起源は不詳だが、長く風土病として存在していた証拠はなく、ヒトへの感染は一気に広まったと考えられている。

新型コロナが変えた社会のひとつに、わが国で遅れていたバーチャルコミュニケーションへのシフトがある。当初は感染回避のために導入されたが、使ってみてすぐにそのメリットに気づくことになった。メリットのひとつが、時間・空間に縛りのないことである。その結果、リモートワークが常態化し、会社の様態も変容している。都内のオフィスを縮小して地方に移り、労働者の満足度を上げただけでなく利益まで増やしたところもある。

会議にもバーチャルコミュニケーションが広く採用されることになった。学術集会もしかりである。2021年春の第62回日本臨床細胞学会総会（春期大会）もオンラインで開催させていただいた。7000名を優に越える方にご参加いただくことができた。大きな混乱も無く無事終えることが出来たことに、この場を借りて皆様に御礼を申し上げる。開催にあたって、感染状況をにらみながら、最終的にハイブリッド開催を選択した。オンライン、現地開催いずれにもメリットとデメリットとがある。日本臨床細胞学会理事会では、佐藤之俊理事長のもとで、今後の学会開催のありかたについての検討が始まっている。個人的には、ポストコロナになっても、時間と空間の制約がないというweb開催のメリットを取り入れた開催が望ましいと考えている。Web開催について思うところを述べてみたい。

オンライン学会—視聴者のメリット

- 1) 空き時間に参加でき、仕事や育児の合間に参加できる。
- 2) 交通費も宿泊費もかからない。
- 3) 並行プログラムも視聴できる。
- 4) スライドが見やすい・声が聞きやすい。スライドは欠けるところなく閲覧でき、音声も確実に聞き取れる。繰り返し見直すこともできる。目と耳、記憶力の悪い私にはこのメリットは大きい。会場移動に戸惑って、冒頭部分を聞き逃すこともない。会場が満員で入れないという心配もない。
- 5) 視聴単位を取りやすい。

オンライン学会—視聴者のデメリット

1) ID やパスワード管理が面倒：パスワードを忘れてしまい、慌てることが少なくない。支払時の ID・パスワードと、web 参加のための ID・パスワードが別になっているなど、多数の ID/パスワードの管理が必要。ID・パスワードがメールで通知されてくるものが多いが、これがまた混乱の種。学術集会ごとに新たな ID・パスワードが設定されるものがある一方で、個人の学会番号とパスワードを流用するパターンがある。前者では、メールの検索機能で ID・パスワードにたどり着ける。しかし、後者ではメール検索では ID にたどり着けない。加えて、強調しておきたい問題点がある。それは、「学術集会の名称を語らずに、コンベンション会社名でのみ通知されるメール」があることである。それらしい学会名でメール検索してもヒットせず、頼みのメール検索機能が役に立たない。見慣れないコンベンション会社名、かつ電話受付なしのケースなどではお手上げである。コンベンション会社には、検索可能なキーワード（学会の名称）を付けてメールを発出するよう是非ともお願いしたい。

2) 参加するのを忘れる：開催期間が長いことが多く油断してしまい、参加費は払ったが参加し損なうという悲しい経験を一度ならずした。同様の経験をおおく耳にする。常時なにかの学会が開催されているような状況なので、要注意である。

3) リトリート感がない：職場や家庭から離れることがないために非日常感が味わえない。視聴中に仕事で呼び出されてしまったりする。公式、非公式の懇親会での旧知・新知の人たちとのコミュニケーションがないのも少し淋しい。もっとも、学会にリトリート感を求めること自体が混同で、改めるべき習慣なのかもしれない。

4) リアルタイムでの討議が難しい：チャットなどでの質問が主体となり、議論が深まらないとの指摘。個人的には使い勝手の問題も大きく、議論の深まりには「チャット」並みに高速にレスポンスするかどうかに依存しているのではないかと思う。この点はメタバースなど新たな技術により改善されていくと期待される。

以上に加えて、オンライン学会には開催側としての視点もある。メリットの第1は、参加者増を期待できる点である。デメリットは費用で、現地開催に加えてweb開催を行う場合、web開催分だけ費用がかさむ。学術集会開催費用は結局のところ参加者の負担である。現地参加者は現地参加のほかwebも利用できる。これに対して、web参加者は自分が利用しない現地開催費用も負担していることになり、両者の案分など工夫できないかと思う。今後、ベンダーが増加して利便性の向上したシステムに進化するとともにweb開催費用の低減が進むことを期待したい。

新型コロナは omicron へと進化した。学会も進化を続け変化に適応していくものと思う。